

一 私があなをに ぼれたのは ちよど十九の春でした  
いまさら 離縁と いうならば もとの十九にして おくぬ

一 もとの十九に するならば 産の 枯木を見て ニらん  
枯木に 花が 咲いたなら 十九に するの ときや すぐしん

一 みすべが あるならば 早く お知らせ 下さるぬ  
し事も 苦く あるうち に 思い 残すな 明日の 花

一 一 銭ニ 銭の 舞臺 田んぼ 千里 田の 旅を するぬ  
同じ ユサ市に 住みながら 会えぬ 吾が 身の せつなさを

一 主さん 主さん と 呼んだとて 主さん 何や 立派な ぬかがある  
くら 主さん と 呼んだとて 一 主さん 何や 片想いの

一 奥山 すすきの ころが イヌは 梅の 小枝が 眉裏して  
三音か 来はるは 何處かを見て ホーケキニ と 鳴いていた

(別紙に 数條 流行り 歌詩あり)